①外国人居留地山上ヨリ港眺望　上野彦馬

上野彦馬とその時代

姫野順一

⑫ ウィーン万博出品

模倣から創作へ飛躍

ベアトやブルガーから湿乾板法を習得し、明治元（1868）年ごろ大型カメラを入手した上野彦馬の撮影技術は、外国人写真師の作品の模倣から創作へと飛躍する。撮影された外国艦船でにぎわう長崎港や、造船所が建造される立神、洋館が立ち並ぶ外国人居留地は、長崎における近代化の表象であった。

欧米からの来訪者は長崎の記憶に土産として彦馬の上質な写真を買い求めた。現在確認できるものとして、「明治初期上野彦馬アルバム」（長崎大附属図書館蔵）や▽大北電信社のデンマーク人支配人旧蔵の「ビュルグフェルトアルバム」（グラバー園蔵）▽オーストリア・ハンガリア帝国の貴族旧蔵の「デュブスキーコレクション」▽アメリカ海軍士官旧蔵の「ミックリーアルバム」（日本カメラ博物館蔵）▽高島炭坑のイギリス人技術者旧蔵の「フレデリック・ポッターアルバム」（長崎大附属図書館蔵）などが知られている。

明治6（1873）年のウィーン万国博覧会に出品された上野彦馬アルバムには、この時期の彦馬の自信作が厳選されている。佐野常民や大隈重信らに主導された日本館は、日本の上質な物産を展示し、国威の発揚を目指した。彦馬の出品作は、和洋が融合して近代に向かう長崎の姿をアピールするものであった。

写真①の3枚組みパノラマ写真は、英語で「外国租界からの長崎港」と題されている。外国人居留地背後の丘から撮影された長崎港のにぎわいである。大判の構図や画質、被写界深度、パノラマ撮影などに、ベアトや外国人写真家から習得・進化した彦馬の創作技量が発揮されている。左端には大浦川沿いの居留地が見え、稲佐側には稼働中の工部省長崎造船所、右端は外国人居留地に組み込まれた出島と新地蔵所が写されている。

写真②は「浦上村立神郷」。珍しく、立神に造成中の長崎造船所立神ドックの基礎工事を撮影している。飽浦の修船場が手狭となり、立神では、工部省工作局のお雇いフランス人技師のワンサン・フロランの設計指導で、艦船の建造・修理のためのドックが計画され工事が進められていた。明治12（1879）年、長さ139㍍、幅27㍍、深さ8㍍の工部省長崎造船所のドライドックとして完成し、明治14（1881）年に三菱長崎造船所に移管される。

写真③は英語のキャプションに「出島アイランドの景色」とある。波の平の波止場から大浦居留地のバンド（船着き場）越しに出島を望んでいる。海岸通りには和洋折衷（擬洋式）の洋館が立ち並ぶ。ここには外国有力商社のオフィスが入居している。旗ざおには領事館の国旗がはためき、中央海上には長崎税関（運上所）の和風倉庫が見える。明治5（1872）年ごろの大浦海岸は日本における外国であり、繁栄の絶頂にあった。

ウィーン出品の彦馬アルバムには、居留地や長崎港のほかに明治初めの長崎市街と、郊外の日見村4枚、時津村2枚が収載されている。写真④は時津村の遠景である。田植えが済んだ田んぼ越しに豊かさを示す屋根瓦の多い街並みが望まれる。右の時津街道沿いに立つのは今も残る茶屋（本陣）である。寛永10（1633）年、街道を通過する大名や長崎奉行のために市場南に設けられた本陣は、文化14（1817）年に藩主の命で高谷正蔵によりこの地に移され茶屋（本陣）となる。写された建物は嘉永元（1848）年に改築されたもので、明治になって民間に払い下げられる以前の茶屋時代を写している。

写真⑤は日見村の網場港と、橘湾に突き出した船津の集落である。ここは網場の中心集落であり、岬側から崎組、中組、浦組に分かれて、それぞれに漁業の神である恵比寿様を祭った。外海側は「先方」と呼ばれ、水の神として先方弁天を祭った。海を見張る浦見番が置かれたので、ここは番所浜と呼ばれた。

右の茂みは網場天満神社の社叢（しゃそう）である。旧日見村の村社であり、境内には社殿を囲んで今も常夜灯、鳥居、神牛が並び、椎の大木をはじめ広葉樹林の温交林が残る。現在は平成3（1991）年の台風で木が失われ、補植が進められている。

彦馬のウィーン万博出品作は、近代化・洋風化・産業文明化が進む長崎の姿と共に、まだ江戸時代の姿を残す郊外も写し取られ、和と洋が混ざり合って文明開化が進む長崎の町の個性的な姿を欧米に伝えている。

（長崎外国語大学長）

……

写真は全てウィーン万博出展「長崎市街之撮影　二十四図　術者　上野彦馬」（東京国立博物館蔵、Image：TNM Image Archives）より

＝偶数月の第3日曜付けサンデーぶんかに掲載＝

②浦上村立神郷　上野彦馬

③外国人居留地ヨ（リ）出島眺望　上野彦馬

④時津村　上野彦馬

⑤日見村網場　上野彦馬

長崎新聞 2024（令和6）年2月18日掲載